

保育のための“遊び”研究考(IX)

再び「はないちもんめ」について(上)

大 森 隆 子

序

筆者が最初に「はないちもんめ」を取り上げたのは、日本保育学会第40回大会の研究発表¹⁾においてである。発表に際しての質疑の時間に、本田和子氏より、「はないちもんめ」遊びの性格づけについて質問をうけた。すなわち、これを鬼遊びとして捉えたことに対して、疑義を呈されるとともにその根拠を問われたのである。幾種かの先行研究事例に則って、子取り鬼の一変型と位置付けて題材の考察を行なった筆者は、その時、氏の発問の真意を咀嚼しかねて適確な返答ができなかった。そして、その問いに深く思いを馳せることなく、「はないちもんめ」論²⁾として脱稿した。

ところがその後同氏の「花一匁」考 子どもたちの歌垣³⁾に接し、この「はないちもんめ」に対しては、古代の民俗行為である“歌垣”を源流となす問答遊びとの見方があること、そして近年、その見解が一つの流れを形成しつつあることが認められるに至った。そこで、あらためて遊びの原点・遊びの研究史に立ち返って「はないちもんめ」の検討を行なおうと思う。本稿では、まず1962年～1972年にかけての先行研究の整理を行ない、そこから見えてくる「はないちもんめ」像やわらべうた観を通して、謎に包まれているわらべ歌遊びの本質に迫ってゆければと思う。

「はないちもんめ」の発祥時期

考察に先立ち、現在流布している諸種の「はないちもんめ」の中から代表的な詞句を一例挙げ、遊び方を含めて紹介しておきたい。

花いちもんめ

- A 勝ってうれしい花いちもんめ
B 負けてくやしい花いちもんめ
A 隣のおばさんちょっとおいで
B 鬼がいるからよういかん
A お釜かぶってちょっとおいで
B それでもこわくてよういかん
A あの子がほしい
B あの子じゃ分かん
A 相談しましょ
B そうしましょ

相談する

- A ちゃんがほしい
B ちゃんがほしい

じゃんけんをする

(名古屋市にて)⁴⁾

この場合の遊び方は、子どもたちは二組に分かれ、それぞれ横一列に手をつないで対面する。じゃんけんで勝った組から歌いだし、相手方に向けて一斉に前進し、ぴょんと足を蹴りあげては、後退して元の位置に戻る。これを交互に繰り返す。相談の結果選ばれた二人がじゃんけんをする。じゃんけんに負けた子は勝った子の組に移り、再び遊びが繰り返される。

このようにして、現在も人気を保って遊ばれ

1) 『日本保育学会第40回大会発表論文集』1987年, pp. 544-545

2) 「保育のための“遊び”研究考 「はないちもんめ」について」(『鹿児島女子短期大学紀要』第23号, 1988年所収, pp. 53-62)

3) 本田和子「花一匁」考 子どもたちの「歌垣」(『現代思想』2, 青土社, 1983年所収)

4) 永田栄一『遊びとわらべうた』青木書店, 1982年, pp. 151-152.

ているこの遊びは、いったいいつ頃出来上がったのであろうか。語感の一端（いちもんめ、お釜）からは、江戸時代が連想されるのだが、実際はかなり後発のようだ。というのは、江戸、明治、大正とその時々資料をあたって、この遊びや詞句は全く姿を見せないのである。目下のところ文献上で特定できる最初の例は、昭和9年発行の『続日本童謡民謡曲集』⁵⁾中にある遊戯歌「はないちもんめ」とみるのが一般的である。次に紹介するのがその詞句である。

はないちもんめ（京都市）
 はないちもんめ もんめ もんめ はないちもんめ
 さん もとめて はないちもんめ
 勝ったら うれしい 負けたら くやしい はないちもんめ

遊び方の説明は、次の通りである。

甲乙各数人を連れ相向かひ はないちもんめ もんめ もんめ はないちもんめ （好きな者、愛嬌者、人気者の名）さん求めてはないちもんめと唱ひながら同時に甲乙各列前進、後退し さん前にいで求めた者と手にて引きとる、とられた方はまけたらくやしい 勝ったらうれしいはないちもんめと唱ひ更に前の遊戯をくりかへす。⁶⁾

このように極めて簡潔な詞句であるが、現在に通じる元歌であることは間違いない。体形や動きの面では今と同じだが、勝敗のル-ルはじゃんけんではなく引っぱりっこであった。

さて、ここで注視しておかねばならぬのは、同書にはもう一例、縄飛び唄としての「はないちもんめ」が掲載されていることである。それは以下の通りである。

花いちもんめ（静岡県沼津地方）
 勝って嬉しい花一もんめ
 負けて口惜しい花一もんめ
 故郷まとめて花一もんめ
 故郷まとめて花一もんめ
 ××さんとりたい花一もんめ
 さんとりたい花一もんめ⁷⁾

明らかにこちらの方が、歌詞的には熟成を見せている。双方を見比べてのル-ツの詮議は別の機会に行なうとして、ここではこうした複数事例の判明から、本来の元歌はそれ以前に、少なくとも大正末期には誕生していたであろうと推測されることを指摘しておきたい。

なお、この件については本城寺氏が言及されており、それによれば、昭和6年7月発行の『民俗芸術』に掲載されている次の詞句

おちよおちよ だんだん星おちよ
 金と銀に分かれ お菊さんとなたねこ花一丁目
 め
 勝ってうれしい花一丁目め
 負けてくやしい花一丁目め⁸⁾

が『はないちもんめ』の第一号として紹介されている。同時に口承例に限れば、大正11・12年頃までは遊ることができる証言されてもいる。

先行研究の検討

1 町田嘉章・浅野建二共著『わらべうた 日本の伝承童謡』⁹⁾（1962年）について

「はないちもんめ」は、前述の『続日本童謡民謡曲集』（1934年）以降、各地の郷土誌やわらべ歌集に、又、北原白秋編『日本伝承童謡集成』他全国規模での渉獵書等に、多数収録されている。しかし、これを考察の対象として何らかの研究の視点をもって取り扱っているのは、この書が最初であろう。

主著者浅野建二は、国語・国文学特に中世近世歌謡の研究者である。この書は、氏の研究領域の延長線上に、その研究手法を用いて成ったものと考えられる。方法的特徴を三点抽出しておきたい。その一は、「各曲の解説は、その曲の採集地・発生や分布圏、特質、並びに古歌謡書と

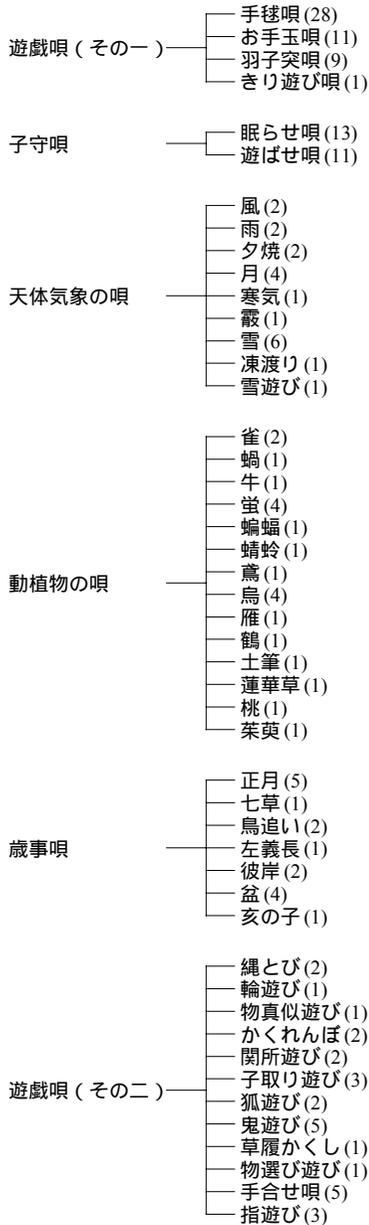
5) 広島高師付属小学校音楽研究部編纂『続日本童謡民謡曲集』柳原書店、1988年。

6) 同上、p. 65。

7) 同上、p. 46。

8) 本城屋勝『わらべうた研究ノ-ト』無明舎出版、1982年、pp. 306-307。

9) 町田嘉章・浅野健二編『わらべうた 日本の伝承童謡』岩波書店、1962年



(数字は例数を示す)

図1 わらべ唄の体系(浅野案)

の関係、曲想に関して必要な最小限度の記を試みた¹⁰⁾とあるように、地理的・歴史的に考証して科学的かつ客観的な姿勢を保持していること。その二は、わらべうたの体系化を構想して分類案(図1)を提示し、「はないちもんめ」を遊戯唄の一つに位置づけたこと。その三は、詞句・曲譜・動き・ル・ルの各側面を統合させて捉えたことである。

次に、具体的内容を検討してみることにしたい。はじめにここで例示されている詞句を挙げてみると、

花いちもんめ 子取り遊び〔秋田〕
 勝ってうれしい 花いちもんめ
 負けて口惜しい 花いちもんめ
 向かいの誰かさん 一寸おいで
 向かいの誰かさん 一寸おいで¹¹⁾

である。この詞句例に対して、著者は「子取り遊びの一種。恐らく京都を中心に全国に普及したものか。本県の歌詞はやや崩れた詞型である¹²⁾と解説し、前掲の『続日本童謡民謡曲集』中の例との整合化をはかっている。又、わらべうたの体系図では、遊戯唄(その二)中の子取り遊び 三例の二番目(図中の位置)に置いている。「雀雀ほしんじょ」と「欲しや欲しや」の間に。説明によれば、各々詞句は全く違うが、遊び方は重なりあうという。子とろ遊び・子買い遊び・子貰い遊びといった異名同類の遊びとして一括できるとの見方である。

2 武田正著『わらべ唄歳時記』¹³⁾

(1969年)について

武田氏は、民俗学の立場からわらべ唄の蒐集・研究に取り組んでこられた。自身の研究を上梓されるにあたって先行研究の状況を概括され、「町田嘉章・浅野建二両氏の『わらべうた』など、風土のなかでわらべ唄を考証し、古典からの系譜を考察し、類歌の分析、典拠の理解を進めて

10) 町田嘉章・浅野健二編『わらべうた 日本の伝承童謡』岩波書店、p.5.

11) 同上、p.233.

12) 同上.

13) 武田正『わらべ唄歳時記』岩崎美術社、1969年.

行く研究の一つの典型を、われわれはそこに見出すことができる。それに民俗研究者や郷土史家の諸研究はさらにそれを深く掘り下げるといふ点で、十分な成果をあげて来たと考えられる¹⁴⁾とおさえたと、本著の視点については次のように説いておられる。それは、「童言葉とわらべ唄の関係を通して、子どもの世界を捉えよう」と問うた柳田国男の視点に立ち返る必要性の強調である。そこには、氏独自のわらべ唄の観もしくはイメ・ジが強く介在しているように思う。すなわち、氏にとってのわらべ唄とは、無条件になつかしいものであって、しかも「このなつかしさは、どこから来るものだろうか」という自問に囚われてもいた。したがって、わらべ唄を見つめる視線は、前書に感じられた文学的詩歌もしくは音楽的歌謡へと通じる地平ではなく、悪口・呪い・謎々等生活感あふれる童言葉へ、なにより、それらを発する子どもの生活や心情に密着した日常語の地平へと通じている。すなわちわらべ唄の研究とは、あくまで子ども(社会的・歴史的)に添って理解すべきことが大切で、大人となった研究者にできる一つの大切なことは、困難ではあるが「子どもの心情にかえて追体験していく視点」¹⁵⁾を保持することではないかというのである。こうした難儀な方法をあえて持ち込むことで、新しい発見を導くのではと期待感を滲ませている。

子どもの生活の視点からわらべ唄を分類する方法として、次の二つを提案されている。一つは、春・夏・秋・冬という季節による区分、二つは、生活のリズムとしてのわらべ唄、節の折り目としてのわらべ唄、民間信仰・社会生活の規制との関係でのわらべ唄という生活内容による3区分である。

具体的内容を検討してみたい。ここでは、59例のわらべ唄が、一年の四季の移ろいや歳時に沿って配列されている。その中で「花いちもんめ」は、春の巻き中 子とろ子とろ の項に、他

の二例とともに紹介されている。その箇所を抜粋してみれば、次の通りである。

子とろ子とろ
どの子 見つけた
ちょっと見 あの子
さあ とって見やれ

「魚や飯 家さ行って食いませよ
二の膳三の膳 小机据えて」
「それもよかるが どの子が欲しい」
(「ムカサリヤ - 」という声が入る)
「誰それさんが欲しい」
「何食っておがす」
「飴か甘露か お菓子の類だ」
「それまた大毒だ」
「一夜造りの甘酒類だ」
「それまた大好きだ」

花いちもんめ
隣の××ちゃん一寸おいで
勝つてうれしい 花いちもんめ
負けてくやしい 花いちもんめ
花をまとめて 花いちもんめ¹⁶⁾
鼻糞まるめて 花いちもんめ

の「花いちもんめ」の説明によれば「最後にジャンケンをして勝った方から一人を取り、相手に人がいなくなるまでやる」とある。

ところでこの「花いちもんめ」には戯れ言が付いている。こうした詞句をあえて選択するところに、氏の考えがよく反映されているように思う。文学的価値の面では論外だが、子どもらの言動や生活感覚はストレートに伝わり、彼らに息づいているわらべ唄の典型といえるからである。

3 小泉文夫『わらべ唄の研究 楽譜編』¹⁷⁾(1969年)について

小泉氏は音楽学・民俗音楽(後に民族音楽へと発展)の立場から、わらべ唄の研究に着手された。この本は「昭和36年に東京の子どもたちが歌っていた「わらべ唄」を集め、それらを

14) 武田正『わらべ唄歳時記』岩崎美術社、p. 312.

15) 同上、p. 313.

16) 同上、p. 68.

17) 小泉文夫編『わらべ唄の研究 楽譜編』わらべ唄の研究刊行会、1969年。

分類,比較しながら研究した成果と,その資料となった比較総譜とからなっている」¹⁸⁾ものである。氏は研究の動機について二点あげておられる。その一は,日本音楽を科学的に研究しようという方法論上の要請から,「わらべうたの研究は,最も初歩的であり基本的である」¹⁹⁾という理由で取り上げたということ,その二は,「音楽」の概念にかかわる検証の必要からである。「音楽を絵画や文学や造形美術のような芸術の1分野というよりは,言語・風俗・習慣などと並列できるもの,フォークロアの1分野という意味に於て,別の言葉でいえば,社会の上層における意識的な問題というよりも基層における無意識的な表現として,学問的にとらえるという見方が果たして方法的に可能であるかどうか,これを問題としてみた」²⁰⁾という氏ならではの独創的な着眼からである。

こうした実証科学としての音楽研究では,普遍的なデ-タ-を基とする研究が志向される。そのため,一時に大量のデ-タ-を集めねばならず,必然的に共同研究に向かったという。その成果をまとめたのがこの書であるが,この中に採用しているわらべうたの分類法は,先行の分類例もしくは枠組みにとらわれない斬新なものとなっている。

氏は,歌詞の内容によって分類してきたこれまでの方法は,わらべうたの実情に即していないという。「わらべうたは,他のあそびのためにあるので,遊び道具のようなものです。まりつきの時のまりのように,お手合わせうたがないと,お手合わせはできないのです。ですから,遊びによってわらべうたを分類するほうが,よほど実際的です」²¹⁾として,わらべたを遊び別に10種類に分類し,0~9までの数字を付した。順序は,遊びのル-ルが“単純で部分的なもの”から“複雑で構成的なもの”へというのを原則と

する。その上で第二次分類を行なう。遊びの技法の種類と構成法により,簡単なものから複雑なものへとさらに,0から9まで。この二つの数字で二桁の数を作り,遊びの一つひとつを数字化した。次に示す通りである。

00	09	となえうた Play songs without gesture
10	19	絵かきうた Picture-drawing songs
20	29	おはじき・石けり Play songs using marbles & rocks
30	39	お手玉・羽子つき Play songs for bean bags
40	40	まりつき Ball bouncing songs
50	59	なわとび Jump rope songs
60	69	じゃんけん Rock-scissors-paper matching songs
70	79	お手合わせ Hand clapping game songs
80	89	からだ遊び Game songs with body movements
90	99	鬼遊び Game songs for large groups to decide "it" (ogre) ²²⁾

それでは「花一匁」についてみてみよう。この分類によれば,番号は鬼遊び(90-99)を示す96.0である。ちなみに97.0以降は実際上採集されていないから,鬼遊びグル-プの中でも最も複雑なル-ルの遊びと捉えられていることがわかる。

「花一匁」の詞句例については,詳細な楽譜例とともに46例紹介されているが,ここでは代表的な一例をあげておく。

	花一匁
「勝ってうれしい	花一匁」
「負けてくやしい	花一匁」
「隣りのおばさん	ちょっとおいで」
「鬼が こわくて	いかれません」
「お釜 かぶって	ちょっとおいで」

18) 小泉文夫編『わらべうたの研究 楽譜編』わらべうたの研究刊行会, p. ii.

19) 同上, p. v.

20) 同上.

21) 小泉文夫『子どもの遊びとうた』草思社, 1986年, p. 90.

22) 前掲『わらべうたの研究 楽譜編』p. xi.

「それでも こわくて いかれません」
 「ふとん かぶって ちょっとおいで」
 「それでも こわくて いかれません」
 「あの子が欲しい」
 「あの子じゃわからん」
 「この子が欲しい」
 「この子じゃわからん」
 「相談しよう」
 「そうしよう」
 「　　ちゃんが欲しい」
 「××ちゃんが欲しい」
 じゃんけんぼん あいこでしょ(または「ひっ
 ぱりっこ」をする)
 このあとはじめにもどる²³⁾

前出例と比較して、問答部分が長く興味深い
 詞句構成になっている。

4 上笙一郎『日本のわらべ唄 民族の 幼な心』²⁴⁾(1972年)について

上氏は、主要には児童文化研究の立場から、
 興味深い文化材の一つとしてわらべ唄に関心を
 寄せてきた。しかしそれとは別に氏自身、己れ
 の人生の折々に幼い日のわらべ唄を甦らせてい
 た。

一個の社会人として何の破綻もなく生きていたと
 きには、これら幼少の日々の記憶は、わたしにとっ
 て、なつかしいけれどそれ以上のものではありません
 でした。しかしながら、人生の危機に見舞われて
 その打開の道が見あたらなぬとき、最後の抛りどこ
 ろとして胸に甦って来たのは、「さくらさくら 弥
 生の空をば 見わたすかぎり」とうたう幼い秋
 ちゃんの声であり、あるいはまた「あぶく立った煮
 えたった 煮えたかどうだか食ってみよ」と口
 ずさむ幼な友達の様でした。そしてそのかけがえの
 ない思い出をいつくしみつつ反芻していると、冷え
 冷えとしていた心がいつか底のほうから温もって来
 て、わたしは、人生のたたかいにいま一度出で発と
 うという気持ちを取りもどすことができたので
 す。²⁵⁾

このように、なつかしさと前進へのエネルギー
 - を与えてくれるわらべ唄の思い出、いったい

何に源があるのだらうと自問する。そうして探
 り当てた結論は、わらべ唄のよってたつ社会
 的背景に、すなわち近世日本の共同体的精神に
 到達する。それは個個人が優劣を競う近代競技
 とは違って、

村落共同体の仲間としての子どもたちが、大きい
 子も小さい子もみんないっしょに集まって、手
 をつないでなごやかにこなう集団遊戯に付随した
 唄です。中略 自分たちの仲間を大切に
 し、苦しみや悲しみがあるならばそれを分け担お
 うとする共同体の意識が、豊かに底流していたと
 言わなくてはなりません²⁶⁾

という仲間集団に支えられて花開く遊び唄であ
 ったと考察する。したがって唄とともに甦るの
 は、ともに遊んだ友達の声・友情・温もり等な
 のである。

以上のような個人的視座とは別に、この書を
 まとめるにあたり、関係研究の先行例を概括さ
 れている。氏がおさえたわらべ唄研究の三つの
 傾向を紹介しておきたい。その一は、みずから
 の郷愁からわらべ唄に関心をもち、蒐集・調査
 等特に明確な方法論をもたず、興味のおもむく
 ままに研究しまとめたもの。地方で出版された
 わらべ唄集・郷土誌等の多くが該当する。その
 二は、わらべ唄を 詩 として眺め、その独特
 な興趣に着眼したもので、北原白秋・藪田義雄・
 木また修らに受け継がれたもの。近代的センス
 を持ち込むことに成功したが、文学に拘泥して、
 遊びの側面をみおとしたとする。その三は、日
 本民俗学の一分野としてわらべ唄を採集し研究
 したもの。採集数に比して研究が進んでいると
 はいえないとある。なお、民俗音楽の領域では
 小泉氏によってようやく糸口が見つけだされた
 ところであるとも指摘している。

こうした研究動向のおさえをしたうえで、氏
 は、この書を著すにあたっては、以上の三つの
 研究方法を統一的に把握して「日本のわらべ唄
 の全貌を鑑賞しようところみた²⁷⁾」と述べて

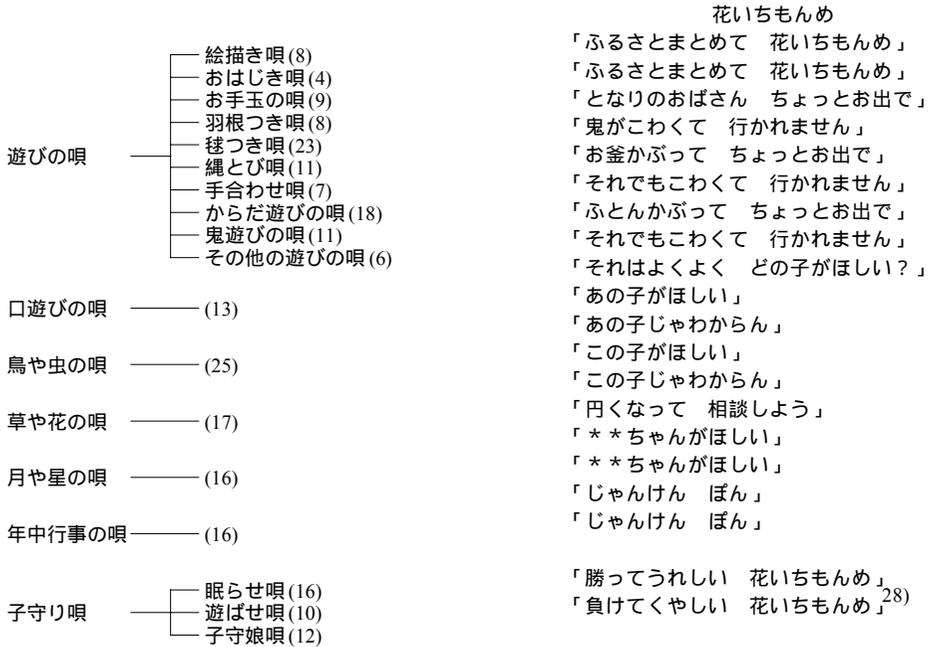
23) 前掲『わらべ唄の研究 楽譜編』, pp. 237-239.

24) 上笙一郎『日本のわらべ唄 民俗の幼なこころ

』三省堂, 1972年.

25) 同上, pp. 2-3.

26) 同上.



(数字は例数を示す)

図2 わらべ唄の体系(上案)

いる。具体的に言えば、児童文化的研究方法と民俗学的方法の統一である。その結果導かれたわらべ唄の体系が図2である。

次に、「花いちもんめ」について具体的にみてみよう。まず、どの位置に置かれているか。ここでは、[遊びの唄]の中の「鬼遊びの唄」の一つ(図中の位置)としておさえられている。ちなみにこの項には、「かごめかごめ」「坊さん坊さん」「和尚さん和尚さん」「子とろ子とろ」「欲しや欲しや」「雀雀ほしんじょ」「花いちもんめ」「ことしの牡丹はよい牡丹」「あぶく立った煮え立った」「開いた開いた」「通りゃんせ」と11例が配されている。ここに挙げられている「花いちもんめ」の詞句例を紹介してみよう。

この「花いちもんめ」は問答部分が長く豊かに発展しているが、問答での勝ち負けは始めから除外されていて、じゃんけんか、引っ張り合いによって勝負が決まるルールであった。

まとめに代えて

町田・浅野、武田、小泉、上氏と四氏の著作を通して1960年代の研究考察を試みた。その結果、それぞれが異にする研究的立場(文学・音楽・民俗学・児童文化)からわらべ唄という同一の対象に接近し、相互に補完・刺激等影響し合いつつ全体として分析の視点をレベル・アップさせていった経過が明らかになった。

「はないちもんめ」の遊び面での成り立ちについていえば、江戸期に盛んであった「子とろ子とろ」²⁸⁾系の遊びから大正末頃に独立したらしいこと、したがって、歴史的推移から子取り遊び「子とろ子とろ」の一つである「はないちもんめ」というおさえ方がスタ・トしたこと、しかし又、そうした経緯にとらわれず、今ある

27) 同上, p. 332.

28) 上笠一郎『日本のわらべ唄 民俗の幼なごころ』三省堂, 1972年, pp. 138-139.

遊びの種別化という視点から、「はないちもんめ」を「鬼遊び」と捉える方法が出現したことも明らかになった。さらに、それぞれの研究者が代表例として挙げた詞句を見ていくと、初めは「子を取る」「子が欲しい」という直截・簡潔な表現であったのが、次第に問答のやり取りに工夫が凝らされて相互に競う興味深い表現に変容されていることもみてとれた。これが年代を経て、その後どういった姿に変化していくのか、関心を寄せながら引き続き辿りたいと思う。

1960年代といえば、小泉氏の調査からも明らかのようにわらべうたは東京の街に豊かに息づいていた。まして、すでに大人であった研究者たちの心には一層明瞭に刻まれていたはずである。こうした背景を背負って展開されたわらべうた論や「はないちもんめ」考が、その後わらべうたの衰退期とともにどういった歩みを見せるのか今後の課題としたい。